言語機能の特性と言語多様性

―問返し疑問文と３部門並列モデル―

稲田俊明
（九州大学）

キーワード：言語機能、言語多様性、問返し疑問文、３部門並列モデル

０．はじめに

言語の普遍的特性を説明すると共に、文法の多様性を生み出し制御している言語機能の理論は、どのような特性を備えていなければならないかを考察する。多様性を許容し説明できる理論の下では、疑問文、受動文、否定文、補文（従属節）など文法の中核的な構造と考えられている部分にも言語変異が現れることが予測される。また、任意の文法における特殊構文の存在も、単なる例外現象として理論の対象外とされるのではなく、その生成過程を自然に説明することが可能になる。

まず、比較的容易に観察できる言語変異の具体例で、パラメータ設定によるものとは考えられないものとして、日英語の文副詞表現の相違を見てみよう。

(1) a. Frankly (speaking), John is a liar.
　　b. Technically (speaking), the analysis is not adequate.
(2) a. 正直に *(言えば)、ジョンは嘘つきだ。
　　b. 専門的に *(言えば)、その分析は妥当ではない。

英語では、(1)の括弧内は省略しても文副詞として解釈できる。一方、日本語では、(2)のなかの「発話行為指標」を省略すると、文副詞とは解釈できない。

これと並行した現象として、日英語の問い返し疑問文の相違を挙げることができる（McCawley (1987)に倣って、純粋疑問文と区別するため、問い返し疑問文は“??”でマークすることにする）。

(3) A: John bought a parachute.
　　B: He bought WHAT??

(4) A: 太郎がパラシュートを買った。
B: 太郎が何を買ったって??

英語では、問い返し疑問文特有の形式は表面的には現れない。他方、(4)の日本語の問い返し疑問文には、特有の文末表現がある。文副詞表現の場合と並行的に、日本語ではある部分が明示的に表示されているが、英語ではその部分が明示的に表示されていない。勿論、英語の場合も、日本語に対応する無形の形式が常に存在すると仮定することもできるが、それだけでは言語差を説明したことにはならない。

以下では、日英語の問い返し疑問文の文法を考察し、そのような文法を生み出す言語機能の理論について議論する。また、形式と意味のインターフェイスに関しても、標準的アプローチではなく、「並列構成モデル」(Jackendoff (1997, 2002)) が、基本的により妥当であることを示したい。

１．言語機能と文法の生成

文法を生み出す能力である言語機能は、どのような特性を備えているのだろうか。まず、生成文法における標準的なモデルは、概略的に図示すると(5)のようになるであろう。

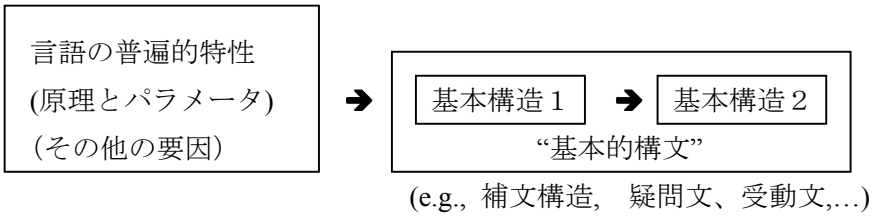
(5) 標準モデルによる基本的構文の生成

言語の普遍的特性 (原理とパラメータ)	➔	文法の中核部 (文の基本構造)

このモデルは、構文と呼ばれる構成物を生成しない。このシステムが生成し得るのは、言語の基本構造とでも呼ぶべきもののみからなる「核文法」であるので、定義上、言語差が生じ得る「構文」は、（パラメータ設定による変異を除けば）始めから説明の対象からはずされている。

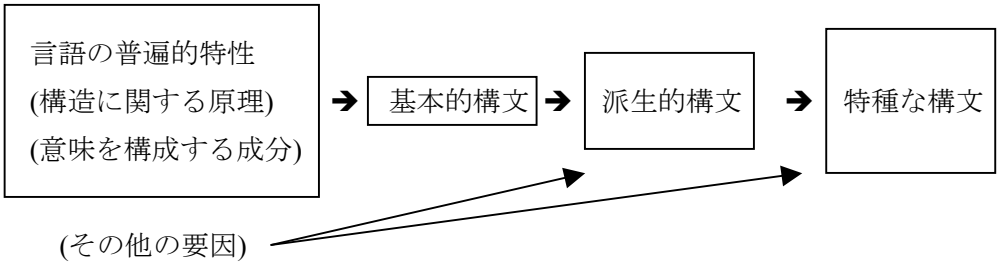
しかし、基本的構文と考えられるものには、受動文、補文構造、疑問文、否定文等のように、言語ごとに異なる構造を持つものがある (Inada and Imanishi (1997, 2003), Comorovski (1996), Boeckx and Grohmann (2003), Imanishi (2003), Kajita (2002, 2004))。それらの構造的変異がパラメータによるものではなく、当該言語の文法の語彙、形態、形式的特徴等によるものであることになれば、「標準モデル」も下記のように修正するほうがよいであろう。

(6) 修正標準モデルによる言語変異の生成



この小論では、更に、下記のようなモデルを仮定することにより、言語変異や多様性を説明し制御する言語機能の理論が得られることを論じる。

(7) 機能拡張モデルによる多様な構文の生成



このようなモデルを想定すべき証拠については、Inada and Imanishi (1997, 2003)で詳細に検討されている。また、言語機能に関する機能拡張モデルは、基本的に「動的文法モデル」(Kajita (1977, 1997, 2002, 2004))の枠組みに従ったものである。

2. 問い返し疑問文と言語変異

2.1. 日英語の問い返し疑問文

議論の詳細は省略するが、Inada and Imanishi (2003)では、通言語的な観察に基づいて、問い返し疑問文の特性は、各言語の純粋疑問文の特性と当該言語に存在する他の文法装置との相互作用によって生成されると主張した。

例えば、日英語の問い返し疑問文の相違を見てみよう (Ota (1977), McCawley (1989), Quirk et al. (1985), McCawley ((1988), Blakemore (1994), Noh (1998), Iwao (2003), Iwata (2003), Inada and Imanishi (2003), etc.)。多様性を生み出す言語機能の理論は、問い返し疑問文に共通の特性だけではなく、言語毎に異なる特徴も自然に説明しなければならない。

日本語の問い返し疑問文：

(8) A: 太郎がパラシュートを買った。

B: 太郎が何を買ったって??

(9) A: 次郎は昨日ナイキの店に行ったの?

B: 次郎が昨日どこに行ったかって?? (注１)

(10) A: ジョンはいつパラシュートを買ったの?

B: 誰がいつパラシュートを買ったかって??

英語の問い返し疑問文:

(11) A: Bill came back at midnight.

B: Bill came back WHEN??

(12) A: Have you ever been to Valladoid?

B: Have I ever been WHERE??

(13) A: How did you enjoy the carnival?

B: How did I enjoy WHAT??

日英語の問い返し疑問文に基本的に共通の特徴と考えられる点と、言語毎に異なると考えられる特徴をまとめると、下記のようになる (Pope (1976), Ota (1977), Bolinger (1989), Quirk et al. (1985), McCawley (1987, 1988), etc.)。

日英語の問い返し疑問文 (EQ) の特徴：

(14-A) a. EQ は、疑問の発話の力を持つ。

b. EQ は、先行文脈を必要とする。

c. EQ は、どのような文タイプからも作ることができる。

d. EQ は、疑問のスコープが文全体である。

e. EQ は、フォーカスに特有のアクセント句を持つ。

(14-B) a. 英語の EQ には、日本語とは異なり、統語的マーカがない。

b. 英語の EQ は、純粋疑問文(GQ)とは違い、wh-移動が随意的である。

c. 英語の EQ は、GQ の wh-疑問文とは違い、文末上昇調である。(注２)

d. 英語の EQ は、日本語と違い、埋め込み構造ではない。

このような日英語の EQ に共通の特性(14-A)と、相違する特徴(14-B)を捉えるには、どのような装置が必要だろうか。まず、(14-A)の特性は、次のように述べることができるであろう (注3)。

(15) a. EQ は、（概念・意味インターフェイスにおいて）疑問の「発話の力」が表示されねばならない。

b. EQ は、GQ と異なり、先行発話のなかから答えを探さねばならない。

c. EQ は、文タイプとしては、通常の純粋疑問文とは異なる表示を持つ。
d. EQ は、(b)の性質により、先行発話の関連部分が疑問のスコープに指定されている。
e. EQ の wh-句は、フォーカスである。

次に、英語の EQ の特性(14-B)は、以下のような英語の文法の特性に基づいて派生されると考えられる。

(16) (Ei) 英語には、日本語のような quote-marker (QT) がないので、QT による埋め込み構造はない。
(Eii) 英語の EQ は、形式的に類似した他の wh-in-situ 構文(WHIS)の特性を継承している (注 4)。
(Eiii) 先行文により疑問のスコープが指定されている WHIS では、WH-移動が義務的ではない（wh-移動は、疑問のスコープ指定と関係している）。
(Eiv) 英語では、フォーカスアクセントを持つ焦点句と文末上昇調以外に、EQ-マーキングを示すものはない。

これらを図式的にまとめると下記のようになる。

(17) 英語の疑問文と Wh-移動

	Non-Echo		Echo
Q-Type	Typical GQ	Other GQs （注 5）	Reprise-Type
Intonation	下降調		上昇調
Context	不要	先行文脈必要 (スコープ指定)	

Wh-移動 → Wh-移動は不要 →

他方、日本語には純粋疑問文と異なる wh-in-situ 構文は存在せず、そのような構文を用いたとしても、純粋疑問文と区別することはできない。日本語の EQ を特徴付けているのは、下記の特徴である。

(18) (Ji) 日本語では、文末小辞 (sentence final particle: SFP) が、文タイプマーカとして機能する。
(Jii) 日本語には、quote-marker (QT) が存在し、QT を主要部とする埋め込み構造がある。
(Jiii) 日本語には QT を用いた様々な引用構文が存在する（注 6)。

(Jiv) 日本語の EQ は、QT を持つ他の引用構文の特性を継承している。

2.2. 問い返し疑問文の生成

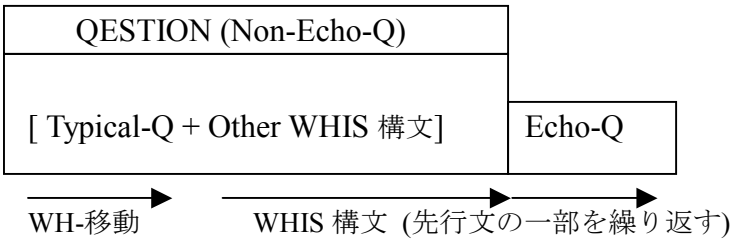
日英語の EQ の特性を概略的にまとめると、下記のようになる。重要な点は、日英語の EQ 構文は、機能的な類似性にもかかわらず、異なる構文から派生された特殊用法であり、当該言語の文法（quote-marker, 埋め込み形式, wh-移動, etc）に依存した特殊構文であると考えられる点である。

(19) 英語の EQ と日本語の EQ

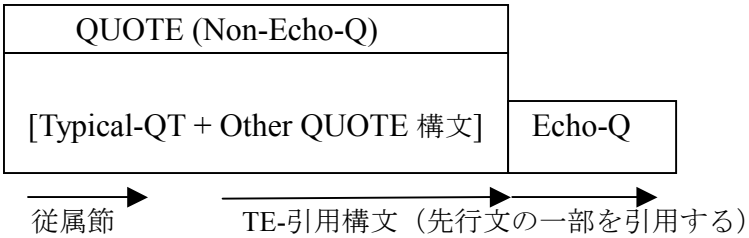
a. 英語の EQ の構造は、WHIS-構文の拡張である。

b. 日本語の EQ の構造は、引用構文の拡張である。

(20) 英語の EQ



(21) 日本語の EQ



日本語の EQ は、基本的に引用構文からの派生的構文である。典型的な「ト-節」による引用（Typical-QT）は、補文標識「ト」による埋め込み構造である。従って、英語の EQ と異なり、日本語の EQ は従属節の性質を持っている。

(22) a. ?*太郎がパーティに来た｛か/かどうか｝？

b. *{Whether/If}John came to the party?

(23) A: 太郎はパーティに来たの？

B1: [太郎が パーティに来た｛か/かどうか｝]って??

B2: [太郎が パーティに来た {か/かどうか}]と言ったの？

(24) A: Did John come to the party?

B1: Did John come to the party??

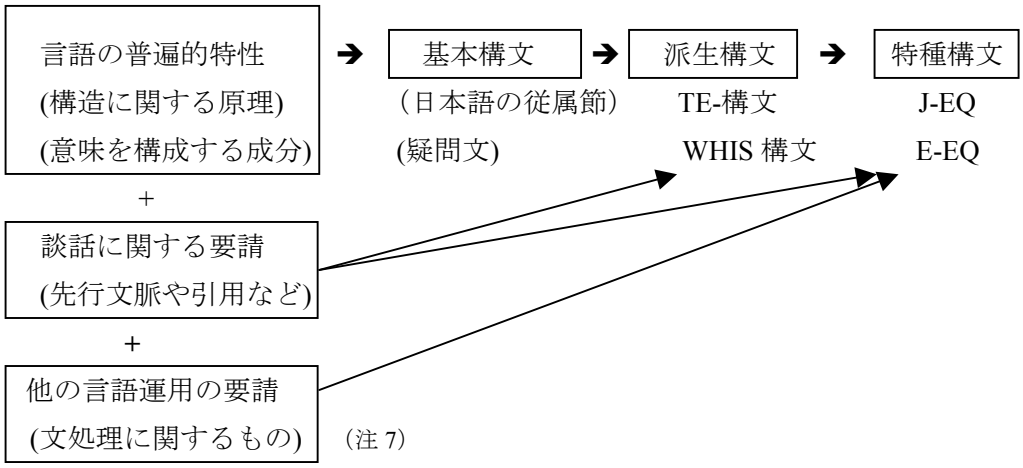
B2: *{Whether/If}John came to the party??

日本語の「かどうか」は独立文では生起できない（「か」は文体による）が、(23-B1, B2)が示すように、EQ と従属節では生起できる。他方、英語の whether/if は(24-B2)が示すように、EQ でも生起できない。

2.3. まとめ

この節までに述べた事項を整理し、日英語の EQ を生成する言語機能のモデルとの関係で図示すると、下記のように表すことができる。重要な点は、特殊な構文の構造は、当該言語の文法の形式的な特徴を最大限に利用し、既成の構造を拡張しながら生成されるという点である。

(25) 機能拡張モデルによる特殊構文の生成



このモデルは、談話に関する要因や文処理上の要因なども取り込み、「言語運用上の要請に文法は最大限に答える」という、近年注目されている言語運用と文法との関係を正しく捉えている。

3. 文法とインターフェイス：並列構成モデル

統語構造 (SS)と意味あるいは概念構造(CS: Conceptual Structure:)との対応関係を考えてみよう。

まず、比較的分かりやすい埋め込み構造に関する言語差として、下記のようなことが考えられる (CS/SS の表示は略式のものである)。

(26) John said [**<u>that</u>** Sue met the President] (, but it is dubious.)

(27) CS: [(x) SAID [[DOUBTFUL] [[QUOTE] [COMP] [(y) MET (z)]]]]]

↓ ↓ ↓

(28) a. SS (L1):	Φ	Φ	Φ
b. SS (L2):	Φ	Φ	[COMP1]
c. SS (L3):	Φ	[COMP 2]	[COMP1]
d. SS (L4):	[COMP 3]	[COMP 2]	[COMP1]

(26)の文の概念構造表示が(27)であるとき、英語の統語構造は (28b) のようになる。つまり、英語型言語 (L2)では、純粋の従属詞 (subordinator/quote marker)はなく、従属詞と補文標識 (complementizer/clausal type marker)が並んで出現することはない。これに対して、日本語・スペイン語型言語 (L3)では、(28c)のようなCP-recursion の構造で実現されることがある (注 8)。しかし、L3 言語では、補文の内容の信憑性を表す補文標識はない。(28d)の L 4 言語では、概念構造にある「信憑性表示」が統語構造で表される可能性を示している。Frajzynger (1995)によると、ポーランド語はそのような補文型を持つ言語である。(28a)の可能性は、直接引用以外に、補文標識を使った埋め込み構造のない言語によって実現される (Navajo 等がそのような言語かも知れない)。

では、問い返し疑問文における日英語の言語変異は、概念構造と統語構造との連携という観点からどのように捉えられるだろうか。まず、疑問文を生成するための意味成分として、下記のような成分が考えられる(Kajita (1993), Karttunen (1977)参照)。

(29) 疑問文を構成する意味成分

a. 疑問の発話の力: Interrogative Force/Request for verbal response. (Q)
b. 疑問のスコープ：Proposition with a missing element. (Q-SCOPE)
c. 疑問のフォーカス：Location of the missing element. (FOCUS)
d. 疑問のタイプ：Type of the missing element. (WH-TYPE)

疑問文に共通のこれらの意味成分に加えて、問い返し疑問文には、更に (30e)が必要である。

(30) 問い返し疑問文を構成する意味成分

a 疑問の発話の力 (=(29a))
b. 疑問のスコープ (=29b))
c. 疑問のフォーカス (=(29c))
d. 疑問のタイプ (=(29d))

e. 疑問のスコープの制約：先行文中から答えよ (EQ-SCOPE)

これらの成分を用いて、GQ と EQ の概念構造表示を概略的に書くと下記のようになるであろう (WH-TYPE は省略)。

(31) GQ: Where did John buy the book?
EQ: John bought the book WHERE??

(32) a. [I-ASK-YOU-TO-TELL-ME [WHERE$_x$ [John bought the book (x)]]]
Q (Request-for-VR) Q-Scope Focus

b [I-ASK-YOU-TO-TELL-ME [**<u>YOU-SAID</u>** [John bought the book WHERE]]]
Q (Request-for-VR) EQ-scope (From D-Context) Focus

便宜的に(32b)の概念構造表示を仮定すると、日英語の EQ 構文の統語構造における相違は、下記のようになると考えることができよう。

(33) CS: [I-ASK-YOU-TO-TELL-ME[**<u>YOU-SAID</u>** [John bought the book WHERE]]]

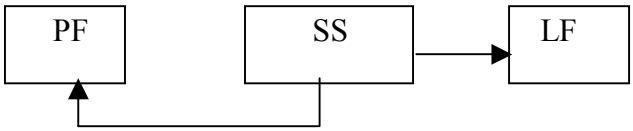
↓

(34) a. SS (Japanese) 具現化 (=> TE-Clause)
b. SS (English) 具現せず (=> Prosody で具現化)

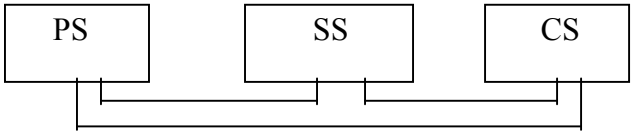
つまり、日本語では概念構造の一部（先行文への言及：談話指示指標）が、引用表現として、統語構造に反映される。他方、英語ではその部分は統語構造には反映されない。 その代わりに、英語では、（純粋の wh-疑問文とは異なる）音韻的特性、特に（フォーカスアクセントと）文末上昇調のイントネーションで表示される。

このように考えると、形式と意味とのインターフェイスに関する生成文法の標準的なアプローチを修正して、概念構造 (CS)と統語構造(SS)との連携のみならず、概念構造(CS)と音韻構造(PS)との連携も必要である。つまり、基本的に「３部門並列構成モデル」(Jackendoff (1997, 2002)が妥当である。両者の違いを、図式的に表すと下記のようになる (詳細は Jackendoff (2002: 125)参照)。

(35) 標準モデル

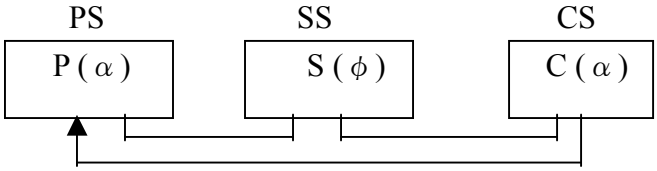


(36) 並列構成モデル

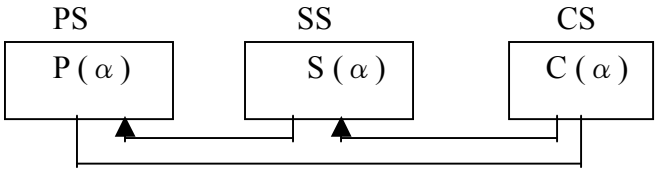


問い返し疑問文の場合、(33)-(34)で見たように、概念構造と統語構造や音韻構造との連携が、日英語では異なっている。つまり許されるオプションの中で、それぞれの構文に最適な連携がインターフェイスで実現されている。このような関係の概略を、３部門並列構成モデルで図示すると下記のようになる。

(37) 英語の EQ 構文



(38) 日本語の EQ 構文



(37) の C (α)は、概念構造における EQ に特有の意味成分である「先行文から解答せよ」という指標であり、(33)では …[YOU SAID] …と表示される部分である (i.e., He ate WHAT?? = TELL ME [what <u>YOU SAID</u> [he ate (x)]])。英語では、この意味成分は統語構造 (SS)に対応物がないが、代わりに音声形式(PF)において、典型的に文末上昇調で表されている（ (37)では、P (α)と表示)。他方、(38)の日本語では、CS におけるこの談話指定指標が、統語構造(SS)に引用構文として表示されている。いずれも、並列構成モデルにおいては、可能な連携様式であり、それぞれの文法が構文（wh-in-situ 構文か引用構文か）により、その最適解を求めていると考えることができる。

４．おわりに

日英語の問い返し疑問文の特性を調べると、まず類似点と相違点が明らかに

なる。また、各言語の問い返し疑問文の構造は、機能的類似性にも拘わらず、独自の構造を持ち、当該言語の他の構文の形式に依存して生成されることが分かる。また、問い返し疑問文は、ある個別言語にのみ存在する特殊な構文というわけではなく、いわゆる「周辺的」現象ではない。純粋疑問文や、受動文、埋め込み節等と同様に、言語により統語形式は異なるが、自然言語に共通の特性から派生されると考えていい。その意味では、人間の言語機能（と運用システム）がこれらの言語変異を生み出すことのできる仕組みを持つと考えるのは自然である。

問い返し疑問文の生成には、談話文脈や文処理という言語運用に関する要因が働いている。このような言語運用の側面からの要請に、インターフェイスを通して、それぞれの文法が最適な形式を用意する。概念構造・意味表示と統語構造や音韻構造との関係を点検すると、その関係は全ての言語において、あるいは全ての構文において一様であるとは言い難いことが分かる。それぞれの文法毎に最適解を見つけ出すと考えるのが妥当である。

ミニマリスト・プログラムでは、言語運用（PF-, LF-Interface の外側）からの文法への要請に関して、文法は最適解を生み出すはずであると主張されている。このことを、本論文で議論した観点から言い換えると、言語は、言語運用に関する要請を満たすように、言語の普遍的特性と文法の個別的装置を用いて、最も効率のよい形式を生み出す、と言えるであろう。

注釈：

＊本稿の内容は、2004 年 12 月、宮城学院女子大学における講演会で発表したものに加筆修正を加えたものである。本研究はまた、日本学術振興会助成研究「言語多様性と言語獲得モデルの研究」（基盤研究）によるものであり、研究分担者の今西典子氏との共同研究の成果の一部である。本稿では、言語機能と文法の生成のメカニズムを中心に議論を進めるために、具体例による検証の部分のほとんどは割愛した。実質的な議論と例証については、Inada and Imanishi (2003)を参照して欲しい。

1) 直接引用の形式により「次郎は昨日どこに行ったのって??」と問返すほうが自然な話者もいる。

2)「文末上昇調」という特性は、英語だけではなく EQ 一般の特徴と言えるかもしれないという指摘を査読者から受けた。 統語的マーカーではなく音韻的に疑問文をマークする手段としてこの特徴が全ての言語に共通である可能性が高い。Bolinger (1989)のように、「問い返し疑問文は、yes/no-疑問文の特徴 (Profile B)を持つ」と考える場合とどちらがよいか検討に値するが、ここでは、この問題は更に追及しない。

3) EQ の特徴のうち純粋疑問文 (GQ)と共通するものは、GQ を構成する意味成分 ((a)

Interrogative Force, (b) Q-Scope, (c) Focus, (d) Wh-Type) に還元できる (Inada and Imanishi (2003))。また、言語変異の一部は、当該言語におけるこれらの成分の配置により説明できる(Kajita (1993), Karttunen (1977))。

4) 英語には、様々な wh-in-situ 構文がある (Quirk et al. (1985), Ginsburg and Sag (2001), Inada and Imanishi (2003), etc.)。例えば、Implicit Wh-Question (IQ)とも呼ぶべき wh-in-situ 構文には、先行文の内容は理解した上で、（前提となっている）追加情報について、更に聞き返すタイプで下記のような例がある。

(i) A. Sue came to the party.
B. Sue came with WHOM? ↘

(ii) A. The next bus is coming.
B. The next bus is coming WHEN? ↘

(iii) Einstein: Time didn't exist.
Friend: Time didn't exist since WHEN? ↘

5) 他にも、Reference Wh-Question, Quiz-Type Wh-Question, Declarative Wh-Question などの wh-in-situ 構文がある。これらの wh-in-situ 構文は、先行文脈が必要である点は、EQ と類似している。しかし、いずれも EQ とは異なり、文末は下降調であり、この点では純粋疑問文と類似している。

6) 詳細は、Iwao (2003)参照。日本語には、「って」を用いた様々な「引用構文」があるが、それらは、問い返し疑問（～と言ったのか?）以外にも、「驚き」（～と（本当に）言っているのか!)、「転送や伝聞」（～と（他の人が）言っている(ようだ))、「確証」（～と（私が）保証する!）のような、「と」による埋め込み構造からの転用と考えることができる。

(i) 焦点部の引用による驚き
A. 入社試験に合格して、内定がでたよ。
B. えっ、内定がでたって! (うそだろう。)

(ii) 引用による内容の転送
Bakabon: 師匠、パパの絵を見て下さい。
Meister：ここへ持って来なさい。
Bakabon (家に帰って Papa に): 持って来いって

(iii) 不特定の意見を引用する拡大転送用法（伝聞的）
A: 風邪を引いてしまったよ。
B: 今年の風邪はしつこいって（よ）。

(iv) 話者自身の意見を引用形式で確証 (I assure you ~)
A: 先生に怒られるぞ。
B: そんなことないって。

いずれの用法も、引用表現の情報源は (i) 先行文の話者、(ii) (iii) 先行文の話者以外、(iv) 発話者本人と、それぞれ異なってはいるが、すべて引用構文からの派生構文と考えるこ

とができるであろう。

文法の拡張という観点から興味深いのは、引用マーカーとしての従属詞「ト」の機能が文末表現へと文法化しているもの、その途中の段階にある用法等、様々な用法が存在し、まさにダイナミックな拡張プロセスが観察される点である。注意すべき点は、Kuno (1988) が指摘するように、「ト-節」の内容は、ダイクシスも含め、直接引用だけではないことである。

7) 英語の EQ には、文処理に関する制約が働いている (McCawley (1987), Janda (1985), etc.)。文理解の過程において、何らかの理由で、先行文の音韻処理、意味処理（辞書へのアクセス）が破綻した場合、未処理の箇所を place-holder として疑問詞に置き換える操作があると考えられる。文処理の破綻による EQ は、当然、wh-移動は不可能である。

(i) A: His son is a famous macroengineer.
B1: His son is a famous WHAT??
B2: *A famous WHAT is his son??

(ii) A: She believes in subjacency.
B1: She believes in WHAT-jacency??
B2: *WHAT-jacency does she believe in??

また、on-line 処理の破綻による場合には、構成素以外を WHAT で置換することもある (McCawley (1987: 251))。

(iii) A: The man tore his laisser-passer into tiny pieces.
B: The man WHAT (about) pieces??

このような場合、疑問詞は特殊な「照応機能」を持ち、照応表現一般の制約も受けると考えることができる (Inada and Imanishi (2003))。

8) スペイン語の埋め込み構造では、日本語と同様に、quote-marker が clausal type marker の外側に現れる (Suñer (1993) , Rivero (1994))。

(i) Sue preguntó [$_{CP}$ (**que**) [$_{CP}$ **quién** camina dormido]]
Sue asked QUOTE who walks in his sleep
'Sue asked who walks in his sleep'

参考文献：

Ausín, A. (1998) "Chinese Type Questions in English," *WCCFL* 17, 30-43.

Barlets, C. (1999) *The Intonation of English Statements and Questions: A Compositional Interpretation,* Garland.

Bhatt, R. and J. Yoon (1992) "On the Composition of COMP and Parameters of V2," *WCCFL* 10, 41-52.

Blakemore, D. (1994) "Echo Questions: A Pragmatic Account," *Lingua* 94, 197-211.

Boeckx, C. (1998) “ Raising Questions about in-situ Wh-phrases in French,” Handout distributed at Ling-Lunch, November 19, MIT.

Boeckx, C. and K. K. Grohmann (eds.) (2003) *Multiple Wh-Fronting*, John Benjamins.

Bolinger, D. (1978) “Asking More than One Thing at a Time,” *Questions* ed. by J. Hiż, 107-150, Reidel.

Bolinger, D. (1978) “Intonation and Its Parts,” *Language* 58, 505-533.

Bolinger, D. (1989) *Intonation and Its Uses: Melody in Grammar and Discourse,* Stanford University Press.

Bošković, Z. (1998) “LF Movement and the Minimalist Program,” *NELS* 28, 43-57.

Bošković, Z. (2002) “ On Multiple Wh-Fronting ,” *Linguistic Iinquiry* 33, 351-383.

Bošković, Z. (2003) “On Wh-islands and Obligatory Wh-Movement Contexts in South Slavic,” In C. Boeckx and K. K. Grohmann (eds.) (2003), 27-50.

Chang, L. (1997) *Wh-in-situ Phenomena in French*, Master’s thesis, University of British Columbia.

Chang, S-J.(1982) “Echo Utterances in Korean: Form and Function,” *Linguistics in the Morning Calm: Selected Papers from SICOL-1981*, 317-328.

Cheng, L. L.-S. (1991) *On the Typology of Wh-questions*, Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, 1997]

Cheng, L. L.-S. and J. Rooryck (2000) “Licensing *Wh*-in-situ,” *Syntax* 3, 1-19.

Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press.

Chomsky, N. (2000) “Minimalist Inquiries,” *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Haward Lasnik*, ed. by Martin et al. 89-155, MIT Press.

Chomsky, N. (2001a) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, MIT Press.

Chomsky, N. (2001b) “Beyond Explanatory Adequacy,” *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20, 1-28.

Comorovsky, I. (1996) *Interrogative Phrases and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers.

den Dikken (2003) “On the Morphosyntax of Wh-Movement,” In C. Boeckx and K. K. Grohmann (eds.) (2003), 77-98.

den Dikken, M. and A.Giannakidou (2002) “From *Hell* to Polarity: “Aggressively Non-D-liked” Wh-phrases as Polarity Items,” LI 33,31-61. In C. Boeckx and K. K. Grohmann (eds.) (2003), 77-98..

Escandell-Vidal,V. (2002) “Echo-Syntax and Metarepresentations,” *Lingua* 112, 871-900.

Frajzyngier, Z. (1995) “A Functional Theory of Complementizers,” *Modality in Grammar and Discourse* (1985) ed. by J. Bybee and S. Fleischman. John Benjamins, 473-505.

Ginzburg, J. and I. Sag (2001) *Interrogative Investigations: The Form, Meaning, and Use of English*

Interrogatives, CSLI.

Higginbotham, J. (1996) “The Semantics of Questions,” *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, ed. by S. Lappin, 361-384, Blackwell.

Huddleston, R. (1994) “The Contrast between Interrogatives and Questions,” *Journal of Linguistics* 30, 411-439.

Imanishi, N. T. Imanishi (今西典子) (2003) 「照応表現研究—普遍性と多様性の探求—」『市川賞 36 年のあゆみ』開拓社.

Inada, T. and N. T. Imanishi (1997) “Complement Selection and Inversion in Embedded Clauses,” *Studies in English Linguistics* (1997) ed. by M. Ukaji et al. Taishukan, 345-377.

Inada, T. (稲田俊明) (2001)「補文内倒置と言語多様性（１）」『文学研究』第 98 号、九州大学人文科学研究院, 1-27.

Inada, T. (稲田俊明) (2002) 「並列構成モデルと辞書インターフェイス」『英語青年』

Inada, T. (稲田俊明) (2003)「補文タイプと倒置構文」『市川賞 36 年のあゆみ』開拓社.

Inada, T. and Noriko T. I. (2003) “What Wh-Echo Questions Tell Us about the Architecture of language Faculty,” *Empirical and Theoretical Investigations into Language—A Festschrift for Masaru Kajita*. ed. by S. Chiba et al. (2003), Kaitakusha. 241-279.

Iwao, T. (岩男孝哲)（2003）「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について『日本語文法』３巻２号、146-162.

Iwata, S. (2003) “Echo Questions are Interrogatives? Another Version of Metarepresentational Analysis,” *Linguistics and Philosophy* 26, 185-254.

Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press.

Jackendoff, R. (2002) *Foundations of Language*, Oxford.

Janda, R. (1985) “Echo-Questions are Evidence for What?,” *CLS* 21, 171-188.

Kajita, M. (1977) “Towards a Dynamic Model of Syntax,” *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.

Kajita, M. (1993) “ ’Principles’, ‘Parameters’ and ‘Evaluation Measure’: A Dynamist’s Appraisal,” paper presented at TCEL.

Kajita, M. (1997) “Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language.” In M. Ukaji et al. (eds.) (1997), 378-93.

Kajita, M. (2002) “A Dynamic Approach to Linguistic Variations,” *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Y. Kato, 161-68.

Kajita, M. (梶田　優) (2004) 「<周辺><例外>は周辺・例外か」『日本語文法』4 巻 2 号、3-23.

Karttunen, L.(1977) “The Syntax and Semantics of Questions,” *Linguistics and Philosophy* 1, 3-44. [Reprinted in Questions, ed. by J. Hiz 165-210, Reidel]

Kuno, S. (1988) “Blended Quasi-Direct Discourse in Japanese,” W. J. Poser (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, CSLI, 75-102.

Maxfield, T. L. (1990) “Children Answer Echo Questions How?” *Papers in the Acquisition of WH*

(UMOP Special Edition). ed. by T. L. Maxfield and B. Plunkett, 203-11.

McCawley, J. D. (1987) "The Syntax of English Echoes," *CLS* 23, 246-256.

McCawley, J. D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English* (2nd. Edition). The University of Chicago Press.

Noh, Eun-Ju (1998) "Echo Questions: Metarepresentation and Pragmatic Enrichment," *Linguistics and Philosophy* 21, 603-628.

Ota, A. (太田 朗) (1977) 『英語と英語教育をめぐって』ELEC.

Pesetsky, D. (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *Representation of (In)definiteness,* ed. by E. Reuland and A. ter Meulen, 98-129, MIT Press.

Pope, E. (1976) *Questions and Answers in English*, Mouton.

Quirk, R., G., S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

Richards, N. (2001) *Movement in Language: Interactions and Architectures*, Oxford Univ.Press.

Rivero, Maria-Luisa (1994) "On the Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*," *Linguistic Inquiry* 25, 547-554.

Rudin, C.(1988) "On Multiple Questions and Multiple Wh-fronting ," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.

Sobin, N. (1990) "On the Syntax of English Echo Questions," *Lingua* 81, 141-167.

Shimazu, M. (1989) "On English WH-Echo Questions," BA Thesis, Ochanomizu University.

Suñer, M. (1993) "About Indirect Questions and Semi-questions," *Linguistics and Philosophy* 16, 45-77.

Ueki, M. (1989) "Echo Questions in German and Japanese," *Text* (Special Issue: Discourse Analysis in Japanese, ed. by Y. Ikegami) 307-320.

Watanabe, A. (1992) "Subjacency and S-structure Movement of Wh-in-situ," *Journal of East-Asian Linguistics* 1, 255-291.

Watanabe, A. (2001) "Wh-in-istu Languages," The *Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by M. Baltin and C. Collins, 203-25, Blackwell.

The Language Faculty and Cross-Linguistic Variation
— Echo-Questions and Tripartite Parallel Model—

INADA, Toshiaki
(Kyushu University)

One of the fundamental problems of linguistics is how to solve tension between describing variations across languages and explaining how the grammar of each language can be acquired. In this short article, I will show that the observed variations in English and Japanese can be adequately dealt with by assuming a different conception of the language faculty than the standard approach in generative grammar. In the proposed approach, the particular clustering of the characteristics in wh-echo questions in each language is claimed to be partially inherited from the related constructions of the language and partially from wh-questions. This leads to the conclusion that a possible range of cross-linguistic variations should be regulated by the laws/principles which guide the process of extension of inter-stage grammars, as is proposed in the Dynamic Approach to Language.